

## 2010 年度 小委員会活動成果報告

(2011 年 2 月 7 日作成)

小委員会名	次世代排水システム小委員会	主 査 名：坂上 恭助 就任年月：2009 年 4 月
所属本委員会 (所属運営委員会)	環境工学委員会 (建築設備運営委員会)	委員長名：宇田川 光弘
設 置 期 間	2009 年 4 月 ～ 2012 年 3 月	
設 置 目 的 各年度活動計画 (箇条書き)	<p>小径排水システム（サイホン排水方式、圧送排水方式等）、自封トラップ等を検討すると共に、建築的および環境的な優位性を評価し、次世代排水システムとしての位置づけを明らかにすることを目的とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 初年度（2009 年度）は、本システムの革新性・優位性を評価する。</li> <li>・ 2 年度（2010 年度）は、本システムの設計・施工指針の限定素案をつくる</li> <li>・ 3 年度（2011 年度）は、本システムの設計・施工指針（案）を策定する。</li> </ul>	
委員構成 (委員名 (所属))	委員公募の有無： なし	
	坂上 恭助 (明治大学)、古賀 誉章 (東京大学)、丸山 秀行 (ブリヂストン) 塚越 信行 (明治大学)、安孫子 義彦 (ジエス)、飯塚 宏 (日建設計) 石村 修一 (旭化成ホームズ)、小沢 数晃 (FAR EAST)、小島 邦晴 (戸田建設) 小池 道広 (長谷工コーポレーション)、小寺 定典 (日本総合住生活)、佐野 武仁 (昭和女子大学) 須賀 良平 (クボタ C I)、高津 靖夫 (芝工業)、本多 勝美 (大林組)	
設置 WG (WG 名：目的)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ デザイン WG：次世代排水システムを用いた建築物の新しいデザインの可能性について検討</li> <li>・ 機械排水 WG：新しい機械排水システムの技術・適用範囲・課題等について検討</li> <li>・ システム WG：サイホン排水システム・無封水トラップ等の技術・適用範囲・課題等について検討</li> </ul>	
2010 年度予算	92,960 円	ホームページ公開の有無： なし 委員会 HP アドレス： なし

項 目	自 己 評 価
委員会開催数	8 回 (年度内計画を含む)
刊行物 (除くシンポジウム資料等)	1. なし
講習会	1. なし <span style="float: right;">参加者数 名</span>
催し物 (シンポジウム・セミナー・研究会・見学会等)	1. 第 1 回次世代排水システムシンポジウム「排水から建築をかえる」 <span style="float: right;">参加者数 131 名</span> (資料) 第 1 回次世代排水システムシンポジウム「排水から建築をかえる」 新しい建築への可能性をめざして
大会研究集会	1. なし <span style="float: right;">参加者数 名</span>
対外的意見表明・パブリックコメント等	1. なし
目標の達成度 (当初の活動計画と得られた成果との関係)	全体：達成度 90%程度 1. 本システムの適用条件等をまとめる → 達成度 80% 2. 本システムの設計・施工指針の限定素案の作成→計画規準へ転換 達成度 80% 3. シンポジウムの開催の企画・検討を行う → 達成度 100%
委員会活動の問題点・課題	1. シンポジウムの準備で、規準に関する十分な議論の時間が取れなかった 2. 企業研究者・実務者が多く、概念や呼称の共通化が難しい 3. より多くの建築意匠設計者の参画が望まれる

\*小委員会活動成果報告書は本書式を基本とする。ただし、それぞれの本委員会において活動実績を報告する共通項目があれば、最下段に項目を追加して記述してもよい。

\*中間年度には中間評価を、最終年度には最終評価としての自己評価を記入すること。

環境工学本委員会用 自己評価欄

## 2010 年度 小委員会活動 自己評価

### (中間年度評価)

総合評価 (4段階評価)	A	B	C	D
<b>総合評価に関する 自由記述欄 (理由、特記事項等)</b>	<p>2010 年度の活動計画は、2009 年度に収集・整理を行った本システムの基礎的な情報に基づいて、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本システムの適用条件等をまとめること</li> <li>・本システムの設計・施工指針の限定素案をつくること</li> <li>・本システムの存在・特性を設計者・施工者・メーカー等の関係者に広く周知し、意見を収集するために、シンポジウムの開催の企画・検討を行う</li> </ul> <p>の3項目を目標として挙げていた。目標の達成度は前2項目は80%、3項目目は100%となり、全体としては90%程度の達成度となった。</p> <p>前2項については、現在の状況を考えて「設計・施工指針」から「計画規準」へと作成文書の目標を変更したことと、シンポジウムの準備で十分に作業・検討する時間がとれなかったため、達成度80%となった。ただし、規準のたたき台案についてはおおむねできており、当初の予定通り来年度はこれを詳細に詰めていくことになる。</p> <p>また、シンポジウムについては、2010年の10月19日(火)の13時30分から17時30分まで、建築会館の大ホールにて開催することができた。ほぼ想定定員の131名の出席を得て、盛大に行われた。特に後半のパネルディスカッションでは、議論が白熱し、学会として次世代技術に対する規準を作ることで普及を促進していくべきとの認識で全体の意見が一致し、今後の取り組みに向けて弾みになる結論を得ることができた。アンケートでも9割の参加者が、参考になる内容だったと評価している。したがって、当初の目的は達成できたと考え、達成度100%とした。</p> <p>なお、2011年度においては、傘下の3つのWGの構成を再編成した上で、今年度の活動を受けて、「計画規準」の詰めを図ることと、その成果をもって2回目のシンポジウムを開催することを目標とする。</p>			

- 総合評価は4段階(A>B>C>D)にて、自己評価すること。
- 中間年度における自己評価は、単年度の活動計画・目標に対する達成度にて、最終年度における自己評価は、小委員会の設置目標に対する達成度にて評価する。自己評価の目安は以下の達成度レベルを参照のこと。
  - A 評価：小委員会設置目標に対し、80%以上の達成度
  - B 評価：小委員会設置目標に対し、70%から80%の達成度
  - C 評価：小委員会設置目標に対し、60%から70%の達成度
  - D 評価：小委員会設置目標に対し、60%以下の達成度
- 小委員会の活動に対し、第三者的評価・外部評価（シンポジウム、セミナー等の催し物を開催した場合に収集した参加者の評価など）に相当する情報がある場合には、その内容も記述すること。